



## 安全登山教室 <7月号>

### 危険な生物に注意！（その2—クマ・イノシシの危害に備えるには）

安全登山教室「危険な生物に注意！」その1の毒のある生物に続き、その2では、やはり山で会いたくない危害を与えられる恐れのある動物、クマ、イノシシについてご一緒に勉強しましょう。

<参考図書：『屋外における危険な生物』財団法人日本自然保護協会（平凡社）>

#### 1. クマ

日本には、ツキノワグマと、より大型なヒグマがおり、生息地も危害の度合いも違います。

クマは、「高知能＝好奇心旺盛＝高学習能力」という特性があり、生息条件、学習状況（人を怖い・怖くないと思う経験の有無など）で、個性のばらつきが大きいことを前提に、出没情報などを把握し対処する必要があります。ただし、クマによる人身事故・死亡事故は、スズメバチの10分の1程度。回避策をしっかり取るのが一番重要です。万が一遭遇した時には、パニックになり、大声をあげたり、背中を向けて逃げだしたりするのがもっとも危険なことを意識し、まずは落ち着くことが肝心です。



##### (1) ツキノワグマ

①見分け方：黒くて、こころした感じ。遠目にはカモシカにも似て見える。首の長さ、肢の太さなどの違いで区別できる。ブナの実を食べる時など、樹上にいることもある。

体長1.2～1.8m。体重オス50～120kg、メス40～70kg。

②生息地：北海道、茨城、千葉、愛知、香川、愛媛、九州、沖縄を除く本州、四国に生息。

ただし、近年生息地域が拡大しつつあり、愛知県でも2019年に1件人身被害が発生している。

③性質：夕暮れ～夜明け前後、濃霧、降雨時などに活発に活動することが多い。冬季は冬籠りする。

ヒグマに比べれば、性質は臆病で、無知から過剰におそれられがち。嗅覚が特に敏感。

ただし、突然出会った場合や、子連れの子グマは危険。人を食害した経験のあるクマは危険。

④遭遇しやすい場所・時間帯：

特に白山山地や奥美濃のような雪深い地域の樹林帯に多く、臆病なので、チシマザサなどに身を潜めていることが多い。ただし、自然林が伐採され住みかを失ったり、ブナの実が不作だったりすると人里近くにも現れる。

ブナは豊作・不作の年が周期的に繰り返されるため、豊作年には個体数が増え、その後不作年になると食物を求め里に出るため遭遇率が高くなる。

登山中、ブナの実を食べるため登ったひっかけ傷の残る幹、昆虫を捕食した跡の残る朽木、糞など痕跡がある場所では、遭遇の可能性が高いので特に注意する。

早朝や、霧の中を入山するような場合は、特に遭遇率が高くなる。クマはクレオソートのような独特の強い臭いがあるので、この臭いが残る場合は至近の時間にクマがいたと考えていい。

⑤被害件数：年間目撃数は全国で1万2千～2万件（ブナ不作の年に増加するが、近年増加傾向）

人身被害は全国年間50～150件、死亡は1～5件、致死率は1.4%程度

⑥被害程度：前肢のひっかけによるものと、噛みつきによるものがほとんど。

## (2) ヒグマ

- ①見分け方:遠くからは黒っぽくみえる。頭から肩が金毛のものもいる。自然の中でとにかく大きく見える。オスの成獣は体長約 2.0m、体重 150~400kg、メスの成獣は体長約 1.5m、体重 100~200kg。陸上の野生動物では国内で最大。
- ②生息地 :北海道の森林地帯。日高山脈、大雪山系を含む中央部山岳地帯と、渡島半島脊梁部に多い。利尻・礼文など離島にはほとんど生息していない。平野部には少ないが、森林に接する札幌市などでは近年市街地での目撃情報が多い。道内すべての山で遭遇の可能性があるとの心構えを持った方がいい。
- ③性質 :人を警戒し、同じ種族に対しても孤独性が強く、人や他の個体と遭遇する頻度の高い地域に生息している個体は、その時間帯や場所を避けて行動する習性がある。嗅覚、聴覚が敏感。例えば、人慣れしている知床のクマと日高のクマでは性質が異なるので、入山する山域のクマの情報を把握することも大切。
- ④遭遇しやすい場所・時間:  
樹林帯のササの中、圏谷(カール)、沢沿いのヤブ、早朝、霧、雨の中など
- ⑤被害件数:人身被害は年間 1~15 件、死亡は 0~4 件、近年増加傾向が顕著  
ツキノワグマに比べ被害件数は多くないが、致死率が 26.5%程度と極めて高い。  
回避策の徹底が命を守る。
- ⑥被害程度:前肢(の爪)による打撃と咬傷が致命的。特に人を食害する目的を持ったクマは危険。

## (3) 回避策(以下、(1)、(2)共通)

注意深いクマに遭遇する最も多いパターンは、クマの活動域に、人の存在を知らせず行動しているような場合なので、これを避ける。

- ①入山予定の山の最新のクマ出没情報などを把握する  
⇒特に東北、北海道では必須。食害経験のあるクマがいる山域は登山を中止する。
- ②クマの活動域を避ける  
⇒山道以外にむやみにヤブの中に入らない、活動的になる夜明け前後、夕方、濃霧、降雨時を避ける。
- ③熊鈴、笛、ラジオを鳴らすなどしてあらかじめ自分の存在をアピールする  
⇒ただし、食害の経験のあるクマなどには逆効果になることもある。  
また、音が大きすぎると逆にクマの気配を感じられなくなることもあるので注意がいる。
- ④漫然と歩かない  
⇒道迷い遭難対策同様、自分の身は自分で守る意識で、常に注意を怠らない。

## (4) 出会ってしまった時の対応(参考:環境省『クマ類の出没対応マニュアル 改訂版』より)

まずは、落ち着いて対応すること。そしてクマとの距離、クマの様子に合わせて対応することが大切。

- ①大声を出さない ②走って逃げない ③取られたものを奪い返さない
- ④クマスプレーを持っている場合は、噴射の準備をする(安全ピンまでは抜かない)

### I 遠くにクマがいることに気が付いた場合(距離 100m 以上)

・落ち着いて静かにその場を立ち去る。

⇒クマが先に人の気配に気づいて隠れる、逃走するケースが多い。もし気が付いていないようなら存在を知らせるため物音を立てるなど様子を見ながら立ち去る。

**×急に大声をあげたり、急な動きをしたりすると、クマが驚いて行動の予測ができなくなるので注意。**

### II 近くにクマがいることに気が付いた場合(距離約 20m~50m)

・まずは落ち着くことが重要。あわてて走って逃げてはいけない。

⇒時にクマが気がついて向かってくる場合がある。本気で攻撃するのではなく、威嚇発信(ブラフチャージ)といい、すぐ立ち止まっては引き返す行動を見せる。このような場合は、落ち着いてクマとの距離を取ること、クマが立ち去る場合がある。

**×クマは逃走するものを追いかける傾向がある。背中を見せて逃げ出すと攻撃性を高める場合がある。クマを見ながらゆっくり後退する、静かに語りかけながら後退するなど落ち着いて距離を取る。**

### Ⅲ 至近距離で突発的に遭遇した場合(距離 20m 以下) ←このような事態に陥らない回避策が重要

- ・クマによる直接攻撃など過激な反応が起きる可能性が高くなる。攻撃を回避する完全な方法はない。
- ・ツキノワグマでは一撃を与えた後、すぐ逃走する場合が多いとされる。顔面、頭部が打撃されることが多いため、両腕で顔面や頭部を覆い、直ちにうつ伏せになるなどして重大な障害や致命的なダメージを最小限にとどめるのが重要。
- ・クマ撃退スプレー(唐辛子成分であるカプサイシンを発射するスプレー)を携行している場合は、クマに向かって噴射することで攻撃を回避できる可能性が高くなる。  
⇒機内持ち込みはできない。北海道では知床や大雪山系などでレンタルがある。



※人慣れした知床のクマへの対応は知床財団のHPを参考に(上記画像も)：

[出会った時は\(ヒグマ対処法\) | 知床財団 | 世界自然遺産「知床」にある公益財団法人 \(shiretoko.or.jp\)](http://shiretoko.or.jp)

#### (5) 応急手当

まずは安全を確保すること。傷、骨折などの手当ての後、一刻も早く医師の手当てを受ける。  
事故を警察や近隣の人々に知らせる。

## 2. イノシシ

イノシシは警戒心が強く、極度に人を避けることから、従来自然の中ではほとんど見かけることがなかったのですが、最近は増加傾向にあり、また六甲山など登山者の多い山では人慣れし、出くわす機会が増えています。



六甲山は特に登山者がイノシシに遭遇する率が高い。  
食料も狙われる。

- (1) 見分け方：足跡やフン、登山道脇の掘り返し跡、牙や体のこすり跡(ぬた場)などのサインで生息が判断できることが多い。農地にイノシシ除けの柵があるのも判断材料になる。
- (2) 生息地：北海道と東北・北陸などの積雪地帯を除く日本各地。特に中部～西日本に多い。暖冬化で生息地が拡大しつつある。山地の森林に潜み、夜間農耕地などに出没する。
- (3) 性質：神経質で警戒心が強い。見慣れないものなどを見かけると、できるだけ避けようとする習性がある。人間と遭遇した場合、普通は逃げ出すが、子連れの場合や興奮状態だと猛然と反撃する場合がある。

(4) 出没しやすい場所・時間帯：

里に近い山中。登山の場合、登山口に近い場所で遭遇することがある。  
もともとは昼行性だが、人目を避けて夜間に行動する場合もある。  
冬眠はしない。肢が短いため積雪の中は行動しない。

(5) 被害件数：人身被害は全国で年間 50～80 件、死亡は 0～2 件。愛知県でも人身被害が発生している。

(6) 被害程度：成獣は 70kg かそれ以上の体重があるうえ、時速 45km で走る事も可能で、全力の突撃を受けると成人男性でも跳ね飛ばされて大けがを負う危険がある。オスの場合、牙が生えているため、鼻先をしゃくり上げるようにして牙を用いた攻撃を行う。牙による攻撃はちょうど成人の太ももの高さに当たるため、死亡事例のほとんどは、内ももの大腿動脈を破られた失血死によるため、ここを守るようにする。メスは牙が短い、代わりに大きな顎で噛み付く場合がある。

(7) 回避策：熊鈴など、クマ対策がイノシシ対策にもなる。クマと違い木登り、岩登りはできないので木の上や岩の上に逃れる。

(8) 応急手当：安全を確保したうえで、止血、骨折の手当て、傷口の洗浄をし、医師にみせる。傷口がひどく汚染されるのが普通なので、全身症状に特に注意する。

年間 100 件以上の目撃情報のある岐阜市の「イノシシに関する注意情報」：[1002646-01.pdf \(gifu.lg.jp\)](https://www.gifu.lg.jp/1002646-01.pdf)

※昆虫やハビと違い、クマやイノシシなど哺乳類は知能が高く、人間を避けようとするので、回避策が特に有効です。登山者の不注意や、餌付けなどの結果、被害に遭い射殺という結果は、できるだけ避けたいもの。登山者に共存の配慮が求められます。

以上